東京新聞

地球の未来を見すえ、三週間にわたって難交渉を続けた国連地球生きもの会議（生物多様性条約第十回締約国会議＝COP10）は先月三十日未明、開催地・名古屋の名を冠した国際ルールで合意に達し、閉幕した。先進国と発展途上国の根深い対立。最後は議長国・日本が指導力を発揮し、百九十三の国・地域の理解を引き出した。議論の行方は非政府組織（NGO）や先住民も見守り、会場の名古屋国際会議場周辺ではイベントや展示に延べ一万人以上の市民が詰め掛けた。

世界各国から集結し、「地球の未来を語る」円卓会議に臨むクラインマザーたち＝10月19日、名古屋市熱田区の熱田神宮会館で

（上から）・ABSに関する名古屋議定書が採択され、感極まった表情を見せる松本議長ら中・「愛知・名古屋議定書」を発表する河村名古屋市長、右は神田愛知県知事・カラフルな民族衣装を身にまとい開幕レセプションに臨む参加者ら・作業部会で揺れた思惑を反映する全国の代表者＝いずれも名古屋市熱田区の名古屋国際会議場で

【COP10での主な成果】

名古屋議定書

- 生物資源（遺伝資源）の利用で生じた利益を公平に配分する
- 利益配分の対象には、生物資源を参考に化学的に合成した派生物は含めない
- 生物資源の入手には、資源の原産国から事前に同意を得る必要がある
- 薬効のある植物の利用法など先住民の伝統的知識にも利益を配分する
- 議定書発効以前に取得した生物資源は利益配分の対象にしない
- 病原体のまん延など人や動植物に危険が及ぶような緊急事態では特別な配慮をする
- 企業などが生物資源を不正に入手、利用していないかを監視する機関を設ける

愛知ターゲット（新戦略目標）

長期目標（2050年まで）
生物多様性が評価され、賢明に利用されることで地球が健全に維持され、すべての人々に恩恵が与えられる「人が自然と共生する世界」の実現

短期目標（20年まで）

主目標：生物多様性の損失を食い止めるため効果的、緊急な行動を実施する

個別目標：
- すべての人が生物多様性の価値を認識する
- 15年までに各国が、生物多様性国家戦略と行動計画をつくる
- 絶滅危く種の保全状況を維持・改善する

里山イニシアティブ
日本の里山をモデルに暮らしと自然が共生する地域の保全を推進

国連生物多様性の10年
11～20年を国連の生態系保護強化期間に。国連総会での採択目指す

生物多様性を分析・評価する国際組織（IPBES）
国連総会で早期に設立を図るよう動き

世界植物保全戦略
20年までに各国の絶滅危く植物の少なくとも75%を保全

地球生きもの会議 COP10 NAGOYA

何が決まった 今後どうなる

利害激突 意義あった

香坂 玲さんに聞く

COP10支援実行委アドバイザー
名古屋市立大准教授

―どう総括するか。

生物資源がもたらす利益の公正な配分（ABS）の議定書が採択され、「名古屋の冠も付いた。一時は採択に危機感も持ったが、愛知ターゲット（資金メカニズムも、遺伝子組み換えに関する「補足議定書」もできた。非常に大きな成果を挙げた。目立った成果を残せなかった気候変動枠組み条約第十五回締約国会議＝COP15＝のコペンハーゲンとは対照的だった。

―先進国と途上国の意見の違いは最後まで埋まらなかった。

利益配分の対象を植民地時代までさかのぼるよう求めたが、これは天文学的な補償額になる。無理がある主張だと彼らも自身も分かっていたはず。この点は引いたかった、ほかで譲歩を引き出そうという交渉カード。ブラフ（脅し）だった。

―作業部会は、議長が定めた二十九日午前零時までに合意できず、決裂・日本が議長を全うし、まとまったのだろうか。

こうしたどり方は異例。見ていてどうかと思う部会で、考えを出し合った結果、問題点が明らかになった。おおむね、どこが譲れないかはっきりした。ぎりぎりの意味で、意義ある手法だったと思う。

―議定書は今後、どうなるのか。

二〇一二年までに各国が署名し、五十カ国に達したら発効する。国内法をどうするかという問題は残るが、企業や研究者は他国からモノを持ってくる時、より厳格になる。日本の製薬業界はさらでも相当慎重だが、研究や開発はより慎重になるだろう。

―会議一致の決定方式に問題はないか。

出資比率に応じて決定権に差をつけると、善意ら優遇に批判されるだろう。多数決にすると、二対の二は途上国が広がる。先進国にきて、追い詰められてしまう。時間とコストがかかるのは仕方ないかもしれない。

―市民には分かりにくい会議だった。

五十ぐらいに分かれて、大きなテーマから、小さなテーマまでごちゃ混ぜ。議論しているのは、船の進む方向の微修正ぐらいで変えて行こうみたいな話だから、だれが世界の大勢を決める。

―本当の議論は、非公開だった。

「この国がこんな勝手なことを言っている」みたいに中傷されることを嫌った、とは思うが、あそこまで閉じたのはよく分からない。

―COP10は市民に何を残したか。

参加者の評判はすこぶる良かった。街行くスタッフがCOP10を知っている。タクシーの運転手さんも、利益配分を理解している。これはCOP10ではなかったこと。事務局スタッフも名古屋をそろえた。市民団体や経済界も関連イベントをやった。市民が一丸となれば、東京や京都以外でも国際会議ができることを証明した。

（聞き手・豊田雅一郎）

中村 安希さん

ルポライター

「真の主役」に成果を

閉幕に寄せて

COP10の会議が終了した十日間、各国の代表は毎日、長いスピーチを繰り返した。その内容は、どの国もほぼ同じで、しかも期間中ずっと変わらなかった。

まずは議長への挨拶。種の保全の重要性。生態系の維持に情熱を持っていること。その後、途上国であれば、「カネをください。技術移転をしてください。貧困問題が解消されなければ、環境保護はできません」と続く。この点に関して、先進国はしらを切る。議論は平行線を辿り、どちらも譲らないけど議論は採択されないから、と、私は予想していた。

■資金提供の賜物

ところが一転、日にち変わった二十日本時間、名古屋市長が採択された。これは、集まった国々が最後まで粘り強く議論し、妥協点を見いだした結果であり、名古屋をはじめとする関係者の努力、もちろん、そして日本や先進国が注ぎ込む資金の賜物である。生物多様性の維持という理想について、延々と繰り返し議論し続けた十日間は、決して時間の無駄ではなかった。関係者はもちろん、日本の納税者にして、私たちも、この点に関して誇りを張るべきだろう。議定書の作成は成功した、とはいえ、ここで一つ指摘しておきたいことがある。

生物多様性と利益の公平な配分に関する議論の真の主役は、実は会議場にはいなかった、という点だ。

先進国と途上国の、資金と利権をめぐって火花を散らし、常に貧困問題と並行して論じられた会議の主題は、生物の話ではなく南北問題のようにも見えた。けれど、さらに話を複雑にするために、単なる南北問題でもないことに気がついた。ナミビア、ブルネイ、ザンビア、多くの途上国政府が利益の分配の強化を求めたが、彼らは本当に「資金がないから」自然が守れないのだろうか？

今年、私はブルネイに行った。国石油と天然ガスで潤っていた。ガイドブックによれば、ギャンブル好きの王子の浪費が百六十億㌦。王子のトイレットペーパー入れは金でできている、らしい。去年訪れたナミビア、その前にたち寄ったザンビアも鉱物資源で潤っていた。私たち先進国の庶民なら屁にも思わない贅沢な暮しと、劣悪な環境で暮らす貧困層が混在していた。問題は「国にカネがないこと」だけではない。

一方の先進国は、経済危機などの影響もあって、財布の紐は固かった。日本も多額の財政赤字を抱えている。先進国の懐事情も厳しいのだ。そう思いながら、進展のない各国政府のスピーチを退屈そうに聞いていた、代表スピーチの途中で、私は携帯メモを取った。

「数十億㌦のお金が、国際安全保障のために使われています。人という種が地球の存亡のために使われなければいけません」

■異なる優先順位

先進国も途上国も、問題はカネがあるか無いかではない、その使い道で、守るべき対象の優先順位だ。国益や利益を守りたいのか、環境をそこに暮らす人々を種を守りたいのか、結局どちらが本当なのか。この会議の主役は誰なのか。地球生態系なのか。COP10とは何なのか。理想を掲げるパフォーマンスか、カネをめぐる政府間の駆け引きここか、それとも現実的な行動への第一歩なのか。

十日間議論を重ねて、生態系維持の理想を語り、日本とて千六百億円以上を注ぎ込んで、名誉ある議定書に署名した。そして、これが日本は三海を隔てた、原発を巡り、米軍基地を建設サンゴの海を破壊する、らしい。この矛盾を小さく指摘されたら、環境大臣はどう答えるのだろう。「議定書にはね、単なる理想が書かれているんだ。そこに現実はちがうんだよ。国防、国益のためには、仕方がないんだよ」

■見えてない現実

さらに皮肉なことに、世界一の経済、軍事大国アメリカは、会議に参加することなく、環境よりも利益を優先した。そんなアメリカからCOP10にやって来た映画界のスーパースター、ハリソン・フォードが住民を集め、その頃、世界各地の漁民や農民や地域住民、会議場から遠く離れた場所で何をしていたのかを私たちは知らない。ハリソン・フォードが語る理想に耳を傾けることはできても、原発に怯える建設予定地の住民に傾ろうもりはなかったように。基地建設でこれから消えていく沖縄のヤンゴは、声さえも持っていない。自然は、自然であれども、ただ、無言のまま消えていく。

ここにもう一度、COP10の真の主役を確認したい。主役は政府ではなく、ローカルコミュニティー。利益ではなく環境。巨大ダムや、ハイテク小規模生産者たち。そして直立するのが、地域住民の生活や、会議に参加した各国の代表として千六百億円以上を注ぎ込んだ、名誉ある議定書に署名した、そして、これが日本は三海を隔てた、原発を巡り、米軍基地を建設サンゴの海を破壊する、らしい。この矛盾を小さく指摘されたら、環境大臣はどう答えるのだろう。「議定書にはね、単なる理想が書かれているんだ。一緒に心から叫ぶ日が来るまで、拍手は保留しておきたい。

子どもたちの笑顔がプリントされた傘を開いて環境保全をアピールした「MERRY COP10」＝10月23日、名古屋市熱田区の白鳥公園で

国際子ども環境会議

（上から）・使われなくなったおもちゃで作った装飾のオブジェ＝名古屋市熱田区の白鳥公園で・活発な意見交換が行われた国際シンポジウム＝名古屋市民のアートビアホールで・スピーチを終え記念撮影にのぞむハリソン・フォードさん＝名古屋市民のホテルで・自転車でホテルを出発するオランダの関係者＝名古屋市区で・生物多様性をテーマにしたタイアップ曲「LIFE IN HARMONY」を歌うMISIAさん＝名古屋市熱田区の名古屋国際会議場で